

氏名(本籍)	ほん 洪	き 起	さむ 三	(韓国)
学位の種類	博士(文学)			
学位記番号	博乙第956号			
学位授与年月日	平成6年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
審査研究科	歴史・人類学研究科			
学位論文題目	韓国における郷歌説話の研究			
主査	筑波大学教授	文学博士	宮田	登
副査	筑波大学教授	文学博士	平山	和彦
副査	筑波大学助教授		佐野	賢治
副査	筑波大学助教授		田中	通彦
副査	筑波大学教授		小澤	俊夫

論文の要旨

本論文は、14章からなる内容で、その主旨は、これまで韓国学の基本文献として知られる『三国遺事』の郷歌説話12篇を1篇ずつとり上げ、個々の説話作品を詳細な読法によって分析し、多様な問題点を摘出し、その構造原理を明らかにしようとしたものである。

序章「課題と方法」では、『三国遺事』の従来の扱われ方に対する反省、とりわけ構造主義的方法の安易な適用、歴史学的な解釈の不整合、古代の宗教生活との関連性における情報不足が指摘されている、そこで著者の方法として、『三国遺事』の記述を郷歌説話として読み直す必要性を論じている。郷歌説話は伝説の形式をもち、内容には巫俗、仏教、儒教、道教など基本的な文化が内包され、韓国・日本の学者がこれまでも注目していたが、本論文では「詳細な読法」より説話作品の構成要素を有機的に統一性をはかろうとしている。そのためには抽象論を避け、人物の行動や事件を具体的事実として把握しようとする。

第1章「孝昭王代竹旨郎」では、歴史上の存在である古代新羅花郎竹旨をめぐる伝説を対象とする。竹旨郎説話は、新羅花郎の政治・社会的没落を反映している。竹旨郎説話の虚構的な要素は、神異譚から生じている。花郎は弥勒信仰との関連でとらえられねばならない。その意味では仏教の深い影響下においてこの説話は成り立つのであり、事実と虚構との関わりが人物伝説を生み出している点を強調した。

第2章「水路夫人」では、新羅聖徳王代の美女水路夫人の2つのエピソードをとりあげている、1つは水路夫人への「献花歌」と東海竜王から救出される説話である。この2つのエピソードは統合さ

れ1つの物語となる。この説話にみられる「老翁」と仏教との関連性を分析し、僧侶・仙人・呪術師を含んだ複合的身分であることを指摘する。これまでは、竜、花、などの素材が統一的にとらえられていなかったという批判に基づいている。

第3章「景德王忠談師表訓大徳」では、景德王を中心に忠談師と表訓大徳を補助者に配した構成であるが、忠談師が2つの郷歌を作ったこと、表訓大徳がシャーマンの役割を果たしていることに注目した。すなわち賢君として知られる景德王が愚君の側面を持ち合わせているという位置づけは、儒教の権威を認めると同時に、民俗文化としての巫俗信仰も包摂した統合的存在となることを指摘している。

第4章「処容郎望海寺」では、処容郎がさまざまな属性をもつ伝説上の人物であるのに対し、そのモデルが憲康王で、彼の事蹟が伝説化したことを強調している。そして憲康王と神との出会いを基本的モチーフとしている。ここにも巫俗と仏教との融合がみられる。さらに、処容郎が門神の役割を担っているシャーマンであったことが類推されている。

第5章「武王」では、薯童のライフ・ストーリーを3段階に分ける。英雄出生譚と夜来者伝説のモチーフがそこに混入する点、薯童が善花公主の教えにより、黄金出土を知ることから「炭焼小五郎」と類似している点、さらに最後に弥勒三尊出現に至る点を論じる。そしてこのモチーフは韓国仏教の性格を語るものであり、観音・阿弥陀信仰とは異なり、弥勒信仰が政治的に正当性を与えるシンボルであったことを指摘している。

第6章「芬皇寺千手悲盲兒得眼」は、希明なる女が失明した子供のために観音に祈願した説話であるが、とくに「塔像」に注目する。塔像は仏教が民間に浸透する際の指標であり、観音の造像が巫俗信仰と習合するプロセスが示唆されている。ここでは巫俗と仏教とが民間において交替する状況を知ることができ、郷歌からそうした文化的背景を知る手掛かりを得たことを指摘している。

第7章「良志指錫」では、実在人物としての良志の行蹟に注目した。良志の神通力と芸術性がとり上げられているが、注目される点は、この説話形式が個人史を語るに際して伝記形式をとらず、彼の特殊な能力を浮彫することを強調していることだとする。良志の行蹟は、仏教民俗的要素が関わっており、彼の呪術性が芸術家的性格を高めていることを指摘している。

第8章「威徳嚴莊」では、郷歌の分析の際には、仏教と関連が強いこと。たとえば月の仏教的象徴性、そして「十九応身」や「四十八大願」の意味を論じた結果、この説話が観想と念仏を通じて西方浄土への念願を祈る純粋な浄土説話であることが確認された。

第9章「月明師兜率歌」では、この説話の構成は一見して別々の要素から成り立つようにみえながら統一されているとみる。1つは、2つの太陽が昇るという事実であり、月明師が郷歌を作ると日の変怪が消えた。2つは月明師が亡くなった妹のために郷歌を作り祀ったということ。3つは月明師が笛を吹くと月は歩みを止めたということ。この3者の物語は、天地・鬼神を感動させる郷歌の力をもった僧侶詩人の形象を1点に集約させること。また仏教的には「兜率歌」と「祭亡妹歌」に弥勒と阿弥陀の2つの信仰形態が包摂されること。さらに民俗的には、日の変怪にみる季節祭、紙銭儀礼を通して巫俗習合がみられることなどを指摘している。

第10章「融天師彗星歌真平王代」では、融天師が「彗星歌」という郷歌を作り、彗星を退治する能力について検討している。この超能力は仏教と結びついていること。またこの彗星は歴史的事実の反映であり、「心大星」を犯した事件が対応する。すなわち花郎集団の役割や日本の軍事勢力の進入による国政の不安を象徴しており、仏教僧の「威通」が時空間を超えて発揮されることを物語っている。

第11章「信忠掛冠」では信忠が「怨歌」を作り、松の木に呪符として用いたことと寺院の縁起譚の形式とを関連させて考察をすすめた。信忠の行蹟には虚構性があり、世俗を離れ隠遁したという記事も『三国遺事』の編者の仏教観を通して理解すべきであることを説いている。また「松の木」には宇宙樹としての象徴性が示唆されていることも指摘している。

第12章「永才退賊」では、群盗に出会った永才が郷歌をうたい、群盗を鎮めたという内容であるが、永才の名称が天賊の才能の持ち主を示していることは明らかであり、一方群盗の正体についても新羅末期の混乱を反映した政治集団ではないかと推察している。

終章「総括と今後の課題」では、『三国遺事』説話が学際的な分析対象となっている議論をまとめ、説話研究方法論の開放を主張している。特に説話学、歴史学、仏教学、民俗学、心理学からのアプローチなどの必然性について、さらにその有機的統一性を目指す構造分析の有効性を述べている。

論 文 の 要 旨

本論文は韓国学の基本文献である『三国遺事』説話研究についての申請者による長年の研究の集大成であり、とりわけ『三国遺事』を学際的にとり上げるべき方法論を提示することにより、学界に新たな知見をもたらすものと高く評価できる内容である。その第一は、『三国遺事』の個々の説話を詳細な読法（close reading）によって再検討した点である。これは従来の研究が郷歌にのみ集中していたことにくらべて郷歌説話の本格的な研究の方向性を確立したものと見える。第二に説話作品を有機的統一性のある全体としてとらえる視点を提示したことである。これも従来の研究が説話の一部だけをとり上げる「部分解読」に偏したことにくらべて、さらに深化させた方法論の提示といえる。第三に説話の虚構的要素に含まれた歴史的事実の発見に努めたこと、また巫俗と仏教との交渉、習合の過程を分析することにより、韓国民俗文化の原型をとらえる試みがなされている点があることである。

こうした新しい方法や領域の提示があるだけに、未解決となっている課題も残されていることも明らかであろう。その第一は、概念設定のあいまいさがあげられる。たとえば叙事=narrative の概念と説話・物語・エピソードなどとの関わりやその差異が不明確であること。また「構成」と「構造」の用語の使い方の不徹底さなどがあることは今後の再検討を必要とするであろう。第二に『三国遺事』の民衆性について民俗学的観点からとらえ直す必要があること、これは編者一然の性格や彼の編集のあり方が考慮されねばならないと思われる。第三に有機的統一性を求める方法論の妥当性については、さらに綿密さが要求されねばならない、しかしこのような課題は残るにしても、従来の『三国遺事』研究を大きく進展させる方向性を本論文は示したのであり、韓国学や日韓文化交流を図る比較民俗学などの分野に対しても著しい刺激を与えていることは明らかである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。